

草の根のアメリカ・マンザナール巡礼

加藤 好文（愛媛大学法文学部教授）

American Grassroots Manzanar Pilgrimage

Yoshifumi KATO

Professor, Faculty of Law and Letters, Ehime University

On April 25th, 2015 I participated for the first time in the "Manzanar pilgrimage", which was held on the grounds of the former Japanese-American internment camp in Manzanar, California, USA. This paper will reconsider the significance of this annual pilgrimage event held on a spot that is regarded as an American "sacred place" representing war. The Manzanar pilgrimage is organized and run by the "Manzanar Committee" — a NPO group run by volunteers. This event is not only to mourn or remember those who died while interned in the camp during World War II, but it also has meaning as a form of "historical education" to pass on to future generations this negative heritage that goes against the American ideals of liberty, equality and democracy. The ceremony in 2015, which marked the 70th anniversary of the end of World War II, began with the telling of stories of suffering from those who actually experienced the camp life. For example, the keynote speech was given by Satsuki Ina an emeritus professor of the Sacramento branch of California State University who was born in the Tule Lake Internment camp in northern California in 1944. Her speech entitled, "*Watashi wa Manzanar: Continuing Our Civil Rights Legacy*" tells the true story of the meaning of the internment camps in America and enthralled the hundreds of people in attendance. However, the difficulty of preserving "pilgrimage land" like this can be easily surmised by the present talk of a plan to construct a large solar electricity plant, but in order to accurately pass down the historical truth of the confinement of people in this desolate desert, the destruction of this landscape should not be allowed. Furthermore, it is important to consider the significance of the Immigration Bureau on Angel Island in the bay of San Francisco, which operated there until 1940, as a historical pilgrimage route because of its role in processing Japanese who landed in America and who were interned during World War II.

はじめに

2015年4月24日～5月1日の間アメリカ合衆国を訪れ、25日にはカリフォルニア州マンザナール日系人収容所跡地で行われた“Manzanar Pilgrimage”「マンザナール・ピルグリミッジ」と呼ばれる年1回の巡礼行事（慰霊祭）に初めて参加した。この収容所は第二次世界大戦中にアメリカ西海岸に住む約12万人の日本人及び日系アメリカ人が強制収容された全米10箇所の一つで、戦争中の1942年から45年にかけて約3年半の期間1万人余りがここでの生活を余儀なくされたのである。マンザナールの地は、ロサンゼルスから内陸部に入って砂漠地帯を抜け、幾重にも連なる山々に囲まれた荒地にある。アメリカ本土（アラスカ州のマッキンリー山を除く）最高峰のホイットニー山（14,494FT）を擁するシエラネバダ山脈の東側に位置するインヨー郡（Inyo County）オーエンズバレー（Owens Valley）にあり、デスバレーに隣接している。ロサンゼルスからは約210マイル北東に位置し、車で約4時間。途中のモハベの町からCA-58へと左折してデハチャピ峠を越えれば、風景が一変して作家ジョン・スタインバックが『怒りのぶどう』（1939）で描いた緑の「楽園」セントラルバレー南端のベーカーズフィールドを目の当たりにすることができるが、そのままモハベ砂漠を貫くCA-14を直進しUS-395に乗って北上すればマンザナールに至る。まさに「天国」と「地獄」の差である。

収容所開設中の1943年に収容所内の日系人たちによって建てられた慰霊塔は今も当時の姿を留め、アメ

リカ的な巡礼地の一つの象徴とされている。『朝日新聞』（2015年5月21日付）によると、現在ではマンザナールに年間約8万人が訪れるとのことであるが、収容されていた日系人たちが解放された戦後、およそ1マイル四方のこの跡地は20年以上に亘って荒廃した状態であった。ところが、60年代の公民権運動の時代にマイノリティに光が当たり始めた結果、1969年から日系人有志による巡礼が始められると、州レベルさらには国による歴史的遺産の保護活動が活発化し、ついに1992年には国の史跡に指定されたのである。本論では、今回現地で見聞したことを踏まえて、「自由 / 平等」というアメリカ建国の基本理念に反する「収容所」という「戦争」を表象する場を「聖地」として、アメリカがこの言わば「負の遺産」を保存し一般市民参加型の「巡礼」を継承する意義について改めて考えてみたい。

I. 歴史的経緯

ここでは、日本人移民に係わる事柄を中心とした日米関係の主な歴史を年表として挙げておく。なお下線を付した箇所は、本論の展開上、筆者が特に重要と考える事項である。まず前半は、日本人のアメリカ移住からその後のアメリカ人との摩擦による日米関係の悪化、さらに太平洋戦争時の日系アメリカ人強制収容に至る歴史的経緯を取り上げる。

- ・ 1868年：明治元年、140余名の日本人が契約労働者としてハワイに渡航。
- ・ 1869年：約40名が会津若松からアメリカ本土のカリフォルニア州サクラメント近郊のゴールドヒルに初めて集団移住し、日本から持ち込んだお茶や桑の栽培など農業に従事するが失敗。（その一人オケイは1871年に19歳の若さで病死。彼女のお墓は、パイオニア精神の指標として現在も現地で大切に保存）
- ・ 1885年：日本・ハワイ政府間に協約が結ばれ、1894年まで10年間にわたり、延べ3万人に及ぶ契約労働者がハワイへ。
- ・ 1894年～95年 日清戦争。
- ・ 1896年：日本郵船、シアトル航路開設。
- ・ 1898年：ハワイ、アメリカに併合される。
- ・ 1904年～5年 日露戦争。（日清・日露の両戦争により、アメリカの日本に対する警戒意識が強まる）
- ・ 1907年：アメリカ西海岸で排日運動強まる。
- ・ 1908年：「日米紳士協定」が結ばれ、アメリカへの移民を自主的に制限。
- ・ 1910年～40年：「アメリカ移民局」、サンフランシスコ湾のエンジェル島に設置。（1920年までに19,000人を超える日本人「写真花嫁」がアメリカ入国）
- ・ 1913年：カリフォルニア州で「外国人土地所有禁止法」制定。
- ・ 1920年：日本政府、「写真花嫁」に対してアメリカ行きの旅券発給を停止。
- ・ 1922年：合衆国最高裁、日本人はアメリカへの帰化権を持たない人種との判決。（「帰化不能外国人」と規定）
- ・ 1924年：「出身国別割当移民法」（通称、「排日移民法」）が施行され、「帰化不能外国人」とされた日本人の「移民」としてのアメリカ入国禁止。
- ・ 1941年：12月7日、日本軍ハワイ真珠湾を攻撃し、太平洋戦争勃発。（→日系人社会の指導者たちがFBIに連行）
- ・ 1942年：2月19日、ルーズベルト大統領、「行政命令第9066号」を発令。（→西海岸に住む日本人及び日系人約12万人が全米10箇所の施設に強制収容）
- ・ 1943年：アメリカ本土に収容中の日系二世で編成された442部隊が、ハワイ在住の日系二世による第100大隊とともに、アメリカ兵としてヨーロッパ戦線で活躍。（同年、マンザナール収容所内に高さ7mのオベリスク風の「慰霊塔」建立）
- ・ 1945年：第二次世界大戦終結。日系人は収容所から解放。（～1946年：全ての収容所閉鎖）

最大600人の収容が可能なエンジェル島アメリカ移民局は火災等もあって40年に閉鎖される。そして戦時中は日本人をはじめドイツ人やイタリア人捕虜を収容する施設として活用されるが、戦後は移民局開設当時をリアルに伝えるミュージアムとして復元され、現在、私のように海外からの観光客も多く引きつけてい

る。アジアからの移民たちはここを通過して本土のサンフランシスコに上陸することになるが、中には病氣持ちのために数ヶ月さらには数年に亘ってこの場に留め置かれた者やそのまま帰国を余儀なくされた者もあり、ミュージアム内の板壁にはそのような人々が作った詩なども刻まれており、当時の彼らの心境を偲ぶことができる。またミュージアムには、上掲したような日本人女性の写真や持ち物も展示されており、アメリカで待つ夫の写真だけを便りに太平洋を渡ってきた着物姿の「写真花嫁」のあどけない表情が印象的である。

さて戦後は日系人たちが立ち上がり、一連の法廷闘争や文筆活動を通じて、「同じアメリカ人」であるはずの日系人に対する戦時中の人権侵害行為の不正義を訴え、「法の下での平等」に反したこのような歴史的事実を直視し今後への警鐘とする活動が活発に展開され、多くのアメリカ人の共感を得ることになる。以下では、マンザナールをはじめ当時の収容所跡地が可視化され、その意味するものがアメリカの各地やアメリカ人の心に刻印されていく戦後の出来事についてみていく。

- ・ 1952年：「マッカラン・ウォルター法」（「1952年移民帰化法」）が制定され、全ての人種がアメリカに帰化できるようになる。
- ・ 1964年：「公民権法成立」。（キング牧師などを中心とした公民権運動の成果）
- ・ 1969年：約200人の学生を中心とした有志たちによる「マンザナール巡礼」始まる。
- ・ 1973年：Jeanne Wakatsuki & James D. Houston, *Farewell to Manzanar* (『マンザナールよさらば』) 出版。（→「収容所」の存在が多くのアメリカ人に知られるようになる）
- ・ 1976年：フォード大統領、「行政命令 9066 号」を正式に廃棄。
- ・ 1979年：「行政命令 9066 号」発令の日である2月19日を「追憶の日」として行事開催。カリフォルニア州ツールレイク収容所跡地に記念碑設置。（中央部の銘板には、「法の下での平等」を謳った合衆国憲法に反する人種差別的行為の事実を明記）
- ・ 1985年：全米日系人博物館、ロサンゼルス（リトルトーキョー地区）に創設。（収容所関連の展示室の設置や文献も多数保管）
- ・ 1988年：「市民的自由法」（"Civil Liberties Act"）成立。（→収容所送りの被害に遭った日系人へのレーガン大統領による公式謝罪と一人当たり2万ドルの補償）
- ・ 1992年：マンザナール収容所跡地が National Historic Site に指定。
- ・ 2001年：ワシントン D.C. に日系アメリカ人記念碑（別名「愛国記念碑」）建設。（有刺鉄線が巻き付いた二羽の鶴をイメージしたモニュメント）
- ・ 2004年：マンザナールに資料館（Interpretive Center）開設。（収容所開設当時の体育館を改築）
- ・ 2005年：マンザナールに当時の監視塔（高さ15m）8塔のうちの 하나가再建。
- ・ 2006年：アメリカ議会が10箇所の収容所跡地整備のために3800万ドルの歳出決定。
- ・ 2010年：マンザナールに当時のバラック小屋（ブロック14）再建開始。（その後、大食堂「メス・ホール」も再建）

1943年にヨーロッパ戦線で活躍する442部隊は、アメリカへの忠誠を誓い愛国心を示すために収容所の二世たちで編成された日系人部隊であり、現在に至るまでアメリカで最も多いメダルを授与されたことでも有名である。一方上掲したように、1979年に設置されたツールレイク収容所跡地の記念碑には「人種差別」という文言が明記され、1988年にはアメリカを代表してレーガン大統領が人種差別行為を率直に認め謝罪している。このようにアメリカの場合は、理念としての「自由 / 平等」の精神と現実の「人種差別 / 愛国心」の噴出は常に背中合わせであり、それらが顕在と潜在を繰り返して来たとは言えないだろうか。しかしいずれにしても、戦後70年の間にアメリカ公民権運動の後押しなどもあり、日系二世・三世以降の世代が戦時中の「人権侵害 / 蹂躪」に抗議の声を上げることにより、さらに、ここには代表的なヒューストン夫妻しか言及していないが、多くの日系人作家たちのペンの力によって、このようにマイノリティの声がマジョリティをも巻き込んで「アメリカの正義 / 良心」を呼び覚まし、アメリカを見つめ直す「機会」と「場」を歴史に刻むことにつながったのである。

Ⅱ．2015年マンザナール・ピルグリミッジ

現地マンザナールでは、全てがボランティアによる非営利教育組織 "Manzanar Committee"（「マンザナール・コミティー」）主催で、毎年4月末の土曜日にこの「巡礼 / 慰霊」が行われている。46回目になる

2015 年の場合は "*Watashi wa Manzanar: Continuing Our Civil Rights Legacy*" を共通テーマにしたもので、この行事には私のような者も含めて数百人が参加していたであろうか、普段は閑散としている広い駐車場が大型バスをはじめ大小さまざまな車で満杯状態となり、私もボランティアの誘導で空いたスペースにレンタカーを停めると、慰霊祭が執り行われる場所へと向かった。だがここで注意しておかねばならないことがある。「マンザナール・ピルグリミッジ」とは、もちろんマンザナールで行われる一連のセレモニーが主ではあるが、それだけを指すものではないはずである。ロサンゼルスやサンフランシスコなどから訪れる者にとっては、都会を離れ、延々と続く荒地と山岳地帯を経て「地獄の地」へと向かう単調な一本道をひたすら走る苦役を通して、かつては行き先も告げられないまま窓を覆われて外の景色も見えない列車や悪路をバスで収容所まで運ばれた日系人たちの恐怖の一端を擬似体験することも巡礼行為の一部ではないだろうか。さらにはマンザナールでの一連のセレモニーを終えて帰路に着く際には、当時の日系人たちの「解放」の喜びと将来への不安に思いを馳せることも、また収容所で亡くなって故郷への帰還を果たせなかった人びとを偲ぶことも巡礼に含まれるだろう。さらに言えば、先述したエンジェル島の「移民局」ミュージアムにまで足を運び、アメリカに渡って来た人々の希望と不安が、後に「絶望」へと至る道程にも想像力を働かせてみることも忘れてはならないであろう。

以上の点を肝に銘じた上で、さて収容所跡地での巡礼 / 慰霊行事に臨むことにする。「聖地」の入り口でボランティアから参加者一人ひとりに手渡された 35 頁に及ぶ冊子の冒頭に掲載されたプログラムを以下に載せておく。なお、筆者が当日参加して特に印象に残り重要と思えたイベントには下線を施している。

PROGRAM

CALL TO ORDER (UCLA Kyodo Taiko) / **WELCOME FROM HOST** (Craig Ishii) / **WELCOME** (Beverly Newell, Tribal Elder, Lone Pine Paiute-Shoshone Reservation / Bernadette Johnson, Superintendent Manzanar National Historic Site) / **STUDENT SPEAKER** (Julia Teranishi, 2013-14 President, UCSD Nikkei Student Union) / **VOICES FROM CAMP** (Pat Sakamoto, Mary Higuchi) / **THE SUE KUNITOMI EMBREY LEGACY AWARD** (Reverend Paul Nakamura) / **MEMORIES OF BAINBRIDGE** (Wilbur Sato, Manzanar Committee) / **MUSICAL INTERLUDE** (Jonathan Lee, UCLA Kyodo Taiko) / **KEYNOTE ADDRESS**(Dr. Satsuki Ina) / **CLOSING REMARKS**(Bruce Kunitomi Embrey, co-chair Manzanar Committee) / **ROLL CALL OF THE CAMPS**(Monica Embrey)

PROCESSION TO THE MONUMENT AND INTERFAITH SERVICE:

BUDDHIST MINISTERS: Rev. Gyoukei Yokoyama (Long Beach Buddhist Church)(officiant), Rev. Shumyo Kojima (Zenshuji Buddhist Mission), and Rev. Ryuji Hayashi (Koyasan Buddhist Temple), Rev. Dr. E.N.Tyler (Tendai Mission of Hawaii)

CHRISTIAN MINISTERS: Rev. Paul Nakamura, Rev. Ruy Mizuki, and Father Richard Hoynes

The interfaith service begins directly after the procession to the monument.

The ondo, or group dancing, will begin at the conclusion of the interfaith service.

プログラム前半は、日差しと砂を含んだ風を避けるためにテントが張られた特設会場のステージで、UCLA の日系人学生たちによる太鼓演奏から始まり、地元関係者の挨拶や収容所生活者の体験談などが続き、そしてクライマックスは 1944 年にツールレイク収容所内で誕生したというカリフォルニア州立大学サクラメント校名誉教授のサツキ・イナ氏による基調講演である。後半は参加者全員が慰霊塔前に移動し、仏教僧とキリスト教牧師そして参列者も交えた異教徒間礼拝式 (Interfaith Service)、さらに焼香と慰霊塔への献花、最後は太鼓のリズムに合わせた日本の伝統的な踊りでフィナーレとなる。全部で 2 時間余りであったが、日米の伝統・文化を踏まえたと思われるセレモニーが続き、実に興味深いものであった。

先述した今回の共通テーマからも推察されるように、参加者一人ひとりがマンザナールを自己のアイデンティティに重ねて見つめ直し、市民がかつて闘い取った「公民権」というアメリカのレガシーを守り継承し

ていくアメリカ的聖地としてこの跡地は機能しているのである。その意味でも、前半最後のイナ氏によるキーノートスピーチは注目に値する。彼女はスピーチの冒頭でまず、「収容所送り」による物質的・精神的喪失を体験し何よりも「誇り」を傷つけられ「恥辱」にまみれた日系人たちが、アメリカで生きて行くために沈黙を守り収容所の記憶を消し去ろうとまでした経緯を語る。そして一世から二世さらにその後の世代に伝播したこのような「トラウマ」が、70年の時が経過する中で、ゆっくりと着実に癒しの方向へと変化する兆候が表れて来たと説く。その証拠として、アメリカ市民としても人間としても、その基本的な権利が犯されることに対して、自分たちの言葉や行動で示す「ノー」の声が次第に大きくなっている点を挙げる。その意味でも彼女は、2015年第46回「マンザナール・ピルグリミッジ」の "*Watashi wa Manzanar: Continuing Our Civil Rights Legacy*" というのは "watershed moment" (重大な転機) を示すもので、国・政府の言葉ではなく、私たち一人ひとりが自分たちの真実の言葉で自分たちのことを語り出すに相応しい時機を得たテーマだと述べ、"I am Manzanar" から "We are Manzanar" に至るこの深遠な "healing journey" の重要性を強く訴えて話を終えている。

第二次世界大戦「戦勝国」アメリカの中の戦争被害者を追悼する慰霊祭において、アメリカを支える理念が大きく揺らいだ歴史を学ぶ場として、この跡地の意義を改めて確認しておきたい。「自由」「平等」「民主主義」を標榜して建国されたアメリカの高邁な理念に反する過去の歴史を教訓とし、未来に語り継いでいこうとする彼らの強い意志を読み取ることができるのである。

Ⅲ. 異教徒間礼拝式

ここでは、セレモニー後半に行われた合同メソジスト教会牧師 (Leader) の主唱に続いて一般参列者 (People) が答唱する形式の異教徒間礼拝式の様子を紹介したい。まずは当日の配布資料 "Interfaith Service — Christian Liturgy" の原文を以下に掲載しておく。なお、筆者が特に注目した箇所には下線を施している。

Leader: I look up to the mountains — where does my help come from?

People: My help comes from the Lord, who made the heavens and earth!

Leader: And so we acknowledge you, O Lord, as our helper and our creator — the One who calls us by name and knows our hearts and minds.

People: We have made this pilgrimage today and give thanks to you, O God, knowing that as the mountains surround Manzanar, so you surround your people.

Leader: We thank you that we do not walk alone. You have not promised us a life free of difficulties.

People: But you have promised that when we face difficulties, you will walk with us... you will never abandon us or forsake us.

Leader: We thank you for sending your Son, Jesus, to walk in our shoes and identify with our suffering. Jesus was betrayed by friends and neighbors. Jesus suffered insults, shame and humiliation. Jesus was unjustly accused. Jesus was innocent.

People: We remember the insults, shame, humiliation and injustice suffered by the Japanese and Japanese Americans whose only "offense" was to be of Japanese descent.

Leader: When Jesus was an infant, Mary and Joseph were forced to quickly pack their belongings and leave their home.

People: We remember the 120,000 people of Japanese descent who were forced to quickly sell their possessions and leave their homes.

Leader: Jesus was born in a stable.

People: Many of the 120,000 were sent to assembly centers and lived in horse stables.

Leader: Jesus was imprisoned by a decree issued by the Roman governor....

People: Executive Order 9066 led to the incarceration of the Japanese and Japanese Americans at Manzanar and Tule Lake in California;

Leader: Poston and Gila River in Arizona;

People: Topaz in Utah; Minidoka in Idaho;

Leader: Heart Mountain in Wyoming; Amache in Colorado;

People: Rohwer and Jerome in Arkansas.

Leader: Through the suffering and death of Jesus on the cross, God provided a way to life and hope.

People: In spite of the hardships and hostile environment, those who were incarcerated continued to hold on to hope. They were able to build a community—a community of joy and tears; a community of laughter and sadness; a community of singing, dancing and love.

Leader: The Bible tells us that God is able to work all things together for good to those who love God.

People: In spite of all the injustices, we remember the good: the strangers who gave a helping hand; the neighbors who stored belongings; the friendships forged; the love that blossomed and led to marriages; the opportunities for a higher education; the jobs that led to careers.

Leader: For years, those incarcerated suffered alone, holding on to the pain. We give thanks for this great nation that sings, "God mend thy every flaw."

People: A flaw was mended with the Civil Liberties Act of 1988 which issued an apology and led to reparations. The healing process began for many survivors.

Leader: The loyalty questionnaires and the draft brought division, suspicion, anger and resentment.

People: Our community continues to bring attention to those divisions and to bring understanding, healing and unity.

Leader: Ultimately, Jesus is about forgiveness, reconciliation, unity, peace, healing, hope and love.

People: May the life, sacrifice and love of Jesus teach and inspire us to love others as Jesus has loved us.

最初に主唱者と参列者が共に主を称え、マンザナール巡礼に導いていただいたことに感謝の祈りを捧げる。次いで、自らには罪がないにもかかわらず不当に侮辱・恥辱・屈辱を被った神の子イエス・キリストと、日本人の血を引くというだけで同様の扱いを受けた日系人たちとを重ね合わせる言葉が続く。それからマリアとヨセフが荷物をまとめて故郷を去らざるを得なかった状況を12万人に及ぶ日系人の故郷追放に重ね、さらに馬小屋で産まれたイエスと当初馬小屋を仮の収容施設として暮らした日系人、ローマの統治者の命令により幽閉されたイエスと大統領行政命令9066号により本格的な強制収容所に監禁された日系アメリカ人の類似点について牧師と一般参列者が交互に唱えた後、全国10箇所の収容所名を唱和して前半を終える。

後半はまず、十字架上でイエスの苦しみと死を経て、生と希望に至る道が神から示されたのだと牧師が唱え、幾多の困難と敵意に満ちた環境の中に監禁された人びとも希望の灯火を絶やさず、喜びと涙、笑いと悲しみ、歌と踊りと愛に満ちたコミュニティを築くことができたのだと参列者が応える。次いで、このような不正義の渦中にあっても、神のご加護のもと、見知らぬ人びとやかかつての隣人たちが手を差し伸べ、友情を紡ぎ、愛を实らせ、さらには高等教育の機会から仕事先まで提供されたことに感謝の言葉を述べ、神が人びとのあらゆる傷を癒してくれると牧師が讃え、アメリカが収容されていた人びとに謝罪し償いを保証する1988年の市民自由法を制定することにより、生存者のヒーリング・プロセスは始まったのだと参列者が応える。さらに、収容中の日系人への忠誠度テストと徴兵が「分裂」「疑念」「怒り」「憤り」をもたらしたと牧師が訴えると、それに対して参列者はそのような様々な「亀裂」に社会が絶えず目を向け続けることにより、「理解」「癒し」「一体感」がもたらされるのだと応じる。最後は主唱者の牧師が、イエスは「許し」「和解」「統一」「平和」「癒し」「希望」そして「愛」の究極の存在であることを告げ、参列者が、そのようなイエスの「命」「犠牲」「愛」が人びとを教え励まし、イエスと同様に他者を愛することができますように、と祈る言葉で締めくくられている。

このような特定の宗教・宗派を超えた荘厳な礼拝式において、現地にゆかりの日系人関係者に限らず、さまざまな出自のアメリカ人の老若男女や、私のように海外から参加した一般の者たちまでもが、トータルで

5分程度の上述した "Leader" と "People" との交互の応答を厳粛な思いで唱和するのである。このような行為に私たちは、宗教心が根付き息吹いているアメリカ社会を強く再認識することができる。

おわりに

2015年は戦後70年の節目の年であったが、アメリカ本土においても、こうした草の根的な市民レベルの地道な活動が46年間に亘る「マンザナール・ピルグリミッジ」を支えて来たのである。私自身がこの巡礼に参加した際に出会ったミシガン州から来てボランティアとして忙しく立ち働いていた70代の日系人女性に聞いたところ、もう12回参加しており今後も続けるとのことで、その目的を尋ねると、**"To honor those who endured this agony"** との答えが返って来た。さらにこのような史跡についての感想を聞くと、**"A sad reminder of the horrors of war, but also of the resilience of human beings"** との返事で、戦争の恐怖を記憶する場であると同時に人間の回復力を想起させる場でもあると語ったところに、アメリカに生きる彼らの正直な気持ちと逞しさにも触れた思いであったことを付け加えておきたい。

一方で、2016年5月にはオバマ大統領の日本・広島訪問、そして同年12月には安倍首相のハワイ・真珠湾訪問という歴史に残る出来事があった。このことが、日系人の収容所問題も含めた太平洋戦争にまつわる日米の心に刺さった大きな「トゲ」を抜くことにつながるのだろうか。他方、9066号発令から75年になる2017年現在、このような過去を想起させる新たな「大統領令」のニュースも気になるところである。

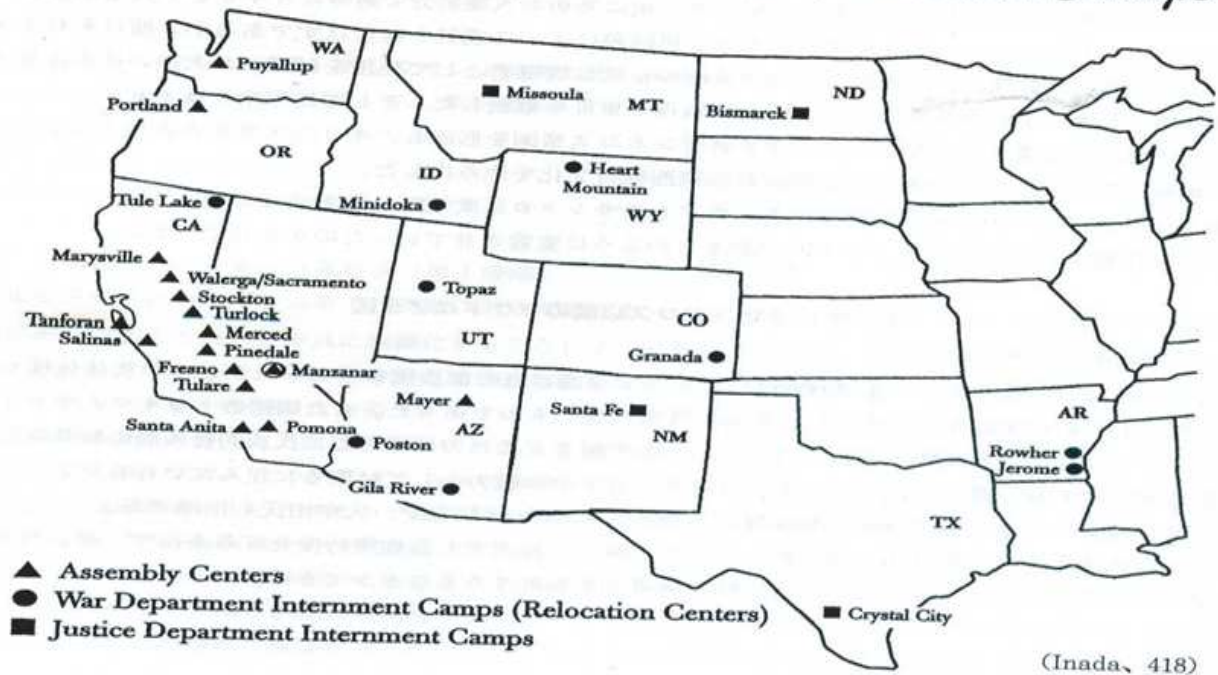
今後待ち構えているのは、現地の景観保存に対する草の根的な取組みであろう。このような巡礼地を保存することの難しさは、現在、マンザナールには大規模な太陽光発電所の建設計画、そしてツールレイク周辺には広大なフェンス建設計画が持ち上がっていることなどからも容易に推察されるが、砂漠化した不毛の地への幽閉という歴史的事実を正しく記憶し伝承するためにも景観の破壊行為は許されない。イナ氏は、そのような建設計画に対する反対運動のリーダーとしても活躍しているとのことであるが、まさにアメリカ的な草の根の運動がここでも欠かせないであろう。

参考文献・URL

- ・ Lawson Fusao Inada ed, *Only What We Could Carry: The Japanese American Internment Experience*. Berkeley, California: Heyday Books, 2000.
- ・ Jeanne Wakatsuki Houston & James D. Houston, *Farewell to Manzanar*. 1973. Boston: Houghton Mifflin, 2002.
- ・ The Manzanar Committee ed., "46th Annual Manzanar Pilgrimage – *Watashi wa Manzanar*: Continuing Our Civil Rights Legacy." April 25, 2015.
- ・ Ruy Mizuki ed., "Interfaith Service – Christian Liturgy & Prayer." (46th Annual Pilgrimage, Manzanar, California). April 25, 2015.
- ・ National Historic Site (National Park Service) ed., "Manzanar." (Manzanar Pilgrimage) 46th Annual / April 25, 2015.
- ・ Angel Island State Park & United States Immigration Station 案内パンフレット
- ・ 朝日新聞「負の歴史残し教訓に一米の日系人強制収容所跡地」(『朝日新聞』、2015年5月21日)
- ・ ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』(人文書院、2002年9月)
- ・ 拙著「アメリカにおける史跡整備と巡礼―日系アメリカ人収容所(跡地)をめぐる―」(『四国遍路と世界の巡礼、その歴史的諸相の解明と国際比較』、2009年3月)
- ・ 拙著「日系アメリカ人と太平洋戦争―収容所体験と記憶の伝承をめぐる―」(『四国遍路と世界の巡礼 公開講演会・研究集会プロシーディングズ』、2011年3月)
- ・ 拙著「日系アメリカ人戦争記念碑と巡礼」(愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会編『巡礼の歴史と現在―四国遍路と世界の巡礼』(岩田書院、2013年10月)
- ・ 拙著「草の根のマンザナール巡礼」(愛媛大学法文学部人文学科『多文化社会研究第3号』、2016年3月)
- ・ <https://manzanarcommittee.files.wordpress.com/2015/05> (2015年9月13日)
- ・ <http://blog.manzanarcommittee.org/2015/04/29/satsuki-ina-keynote-46thpilgrimage-042915/> (2015年9月13日)
- ・ http://www.manzanarcommittee.org/The_Manzanar_Committee/About_Us.html (2016年2月14日)

(参考)

Assembly Centers and Internment Camps



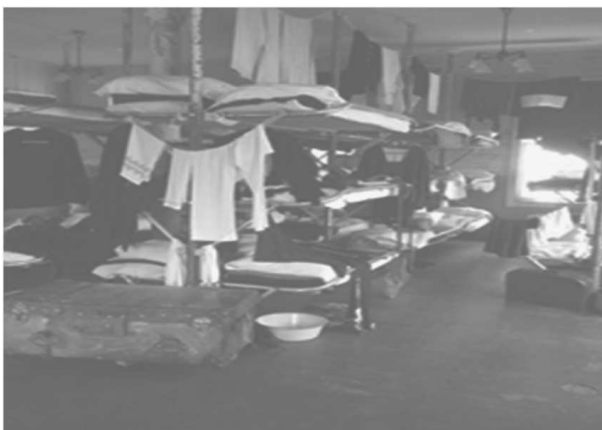
(写真1) 仏教僧とキリスト教牧師による合同慰霊



(写真2) “Watashi wa Manzanar” を掲げる人々



(写真3) 「移民局」当時の3段式簡易ベッド



(写真4) ミュージアムに展示の「写真花嫁」(右)

